

アルパック ニュースレター



多くの観光客で賑わう野島断層保存館（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1998年9月1日

- 地域文化の継承と発展 2
- 北淡町富島コミュニティ住宅が竣工しました 3
- ワシントン村の故郷を訪ねて 4
- 研究課題と資料は自己の内にあり 6
- 「海に浮かぶ光の舞台」を見てきました 8
- うまいもの通信 9
- 新刊旧刊書評紹介 11
- まちかど 12

NO. **91**

地域文化の継承と発展

金井 萬造

草の根交流で地域文化と出会う

昨年の秋、日米草の根交流分科会「コミュニティと伝統文化」訪問団長役で46人（米国人が半分と日本人が半分）の方と山形県庄内地方で500年以上続いている黒川能（重要無形文化財指定、1976年）の里、櫛引町を訪問しました。

今、地域文化を継承する上で何が問題なのか。時代の変化の中で、地域コミュニティの仕組みはこのまま将来も対応できるのか。また、地域の産業や生活の変化に対し具体的にどのように対応しようとしているのか。黒川能の持っている価値が地元町民の共通の認識になっているのかなど少しでも理解したいという欲張りの願望を持って訪れました。その結果、巨大な地域の文化資源の奥深さにふれ、ただただ感激するばかりでした。

黒川能の文化的な価値については、能や文化・芸能の専門家によって評価が進められています。しかし、地域コミュニティづくりの面から見るとまだ、解明されていない面や課題が多く残されています。

さて、交流分科会では、米国人に日本の伝統文化を理解していただくために受け入れ側の努力と工夫が随所に見られました。まず、地域文化の風土の理解を深めるために出羽三山神社の参拝、地域文化の紹介を兼ねた歓迎会の開催、ビデオ鑑賞、神事能の理解を深めるための春日神社参拝と神事参加、ホームステイなどきめ細かい対応は、参加者の共感を呼びました。また、能の「船弁慶」の実演は、交流会を大きく盛り上げました。このような黒川能を通じての多くの体験をもとに、私自

身地域コミュニティの観点からその継承発展に係わりたいという思いを強く持ちました。

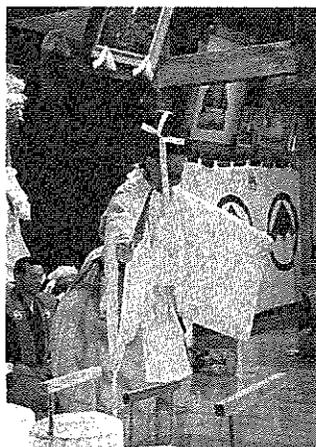
地域文化の継承・発展への地元の動き

感動したのはそれだけではありません。黒川能の地元関係者と櫛引町の強力なパートナーシップをもとに「黒川能の里」づくりの取り組みが進められていると聞きそのエネルギーの大きさにも感心しました。

地域の農業中心の就業構造や能座、能役者の生活パターンが質的变化の過程にあり、多様化、流動化の傾向がみられました。

さて、将来を展望した場合、黒川能を支えていく基盤づくりには、周辺の地域資源との連携、事業性を確保するための広域交流の拡大、文化産業化施策など具体的な地域システムの再構築が課題になると思われます。まさに、従来からある地域と文化の生活上の良さを守り、保持した上で地域全体の運営及び経営の展開が求められているということです。

500年続いた能の歴史の重みは大きく、その内容も豊富で、コンサルタントの視点から



黒川能—上座「所仏則」

みても学ぶべきものが多くあります。例えば、イベントのノウハウ、次世代への継承を組み込んだ祭の巧みな運営など研究の宝庫という印象を受けました。

地域文化おこしへの外部からの協力の可能性

地域文化おこしがうまく展開していくためには、地域文化も地域共通の誇りとして高めていく努力、地域の主体性の確立と運営、経営力の向上、交流時代に対応した官民のパートナーシップが課題であるように思いました。これらの面は、コンサルタントとして外部からも協力できる内容です。幸せなことにこの

度、地元の行政や関係者のご理解を得て、地域の文化おこしに係らせていただく機会を得たことに大きく感謝しているところです。

地域の固有の良さや地域で生活している方々の思いを大切に、今までのストックを活かし今後ソフト面、ハード面での方策づくりに向けて努力したいと思っています。

地域文化による産業おこしは、一つの最終目標ですが、関係者が協力した継続的な努力が不可欠であると感じています。

(代表取締役社長 かない まんぞう)

北淡町富島コミュニティ住宅が竣工しました

山崎 博央

去る7月13日に、淡路島の北淡町に、町営富島コミュニティ住宅が竣工しました。昨年7月の着工からちょうど一年、鉄筋コンクリート造地上6階建のこの住宅は、富島地区第一期の震災復興住宅で、37世帯の入居が予定されています。

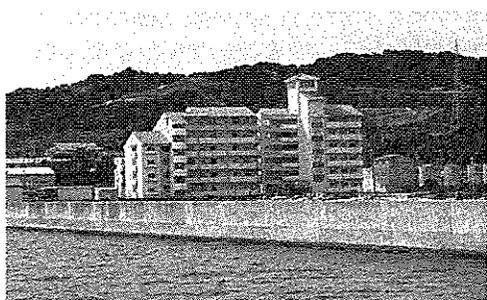
富島地区は、老朽住宅や接道不適合住宅が密集して、道路など公共施設も不足しているといった多くの住環境上の課題を抱える地区であり、先の阪神・淡路大震災により壊滅的な被害を受けた地区でもあります。今回のこのコミュニティ住宅は、震災による被災者や借家人等住宅困窮者の早期の生活再建を図るために、「密集住宅市街地整備促進事業」によって建設されました。

住戸については、高齢者や身体障害者等に配慮したものを含む2DKタイプが16戸、3DKが21戸のあわせて37戸で、これと集会室からなっています。3DK主体の西棟と2DK主体の東棟は、開放的なホールでつながれており、風が通り抜ける心地よい空間となっ

ています。天気の良い日などは、このホールに人が集まって、海を前に世間話に花を咲かせたりできる、そんな場所になれば良いなと思います。

室内は、お年寄りや体の不自由な人も安全に、不自由なく住めるようにと、部屋間の段差をなくしたり、スイッチ等の高さに配慮するといった、バリアフリー住宅となっています。3DKは、全室が二面バルコニーとなっており、北面からは、一面に海を見渡すことができます。特に、東端の3DKの部屋は、三面採光となっており、海への眺望、山への眺望と、何とも贅沢なつくりになっています(できれば私がこの部屋に住みたい…)。

外観については、設計段階から、「とにかくあかるい建物にしたい」という町長たつての要望がありました。あかるい街にしたい、あかるさをもって復興を進めたい、その第一歩となるこの住宅は、何よりもあかるさ、あたたかさを感じさせるものにしたい、そうおっしゃる町長は、自ら現場へ足を運び、その



船から見たコミュニティ住宅

目でイメージボードの色を確認しておられました。白い外壁に屋根の「淡路瓦」のオレンジ色は、まるで地中海のとある漁村を思い起こさせます。

また、瀬戸内海に面するこの住宅は、富島港から徒歩約5分ほどのところにあり、明石から富島へ渡る連絡船から見る事が出来ます。そういったことから、「海からの表玄関」に位置するこの建物が、ランドマーク的存在となることを考慮に入れて、ペントハウスにあかりを灯したり、屋上からライトアップをしたり、陽が暮れると、それはまるで灯台のようにも見えます。本来、「裏」となる面が、海からの眺望を重視することで「海への顔」をつくり、「街への顔」とはまた違った一面を向けてくれます。

完成間近の現場に足を運んだときのことでした。連絡船に同乗していた観光客らしき方

々の中の一人が、港近くまで来た船の中からこの住宅を見て、「リゾートマンションみたいやな」と声を漏らしていました。地中海風に、とおっしゃっていた町長の思いが伝わったのでしょうか。

ここから歩いて5分ほどのところに、今年3月にオープンした「野島断層保存館」があります。今でも震災の爪痕を残しているこの保存館には、毎日たくさんの観光客が立ち寄り、震災の痕を目にしています。その利用者数は、当初想定していた数をはるかに超え、オープンから4ヶ月で既に年間利用想定数に達するのではないかと、といわれています。これは、一つには4月に開通した明石海峡大橋の影響があるのでしょうか。休みの日などは、観光客の車で、身動きがとれないほどの渋滞にもなるそうです。交通量の少なかった北淡町の道路も、今では日に何十台もの観光バスが通るようになっています。

着工して一年、初めての現場のため、要領を得ず、ドタバタしながら、何とか無事、竣工までたどり着くことが出来ました。あとは、入居された方々に満足していただけるのを願うばかりであります。

(京都事務所 やまざき ひろひさ)

ワシントン村の故郷を訪ねて

内村 雄二

兵庫県三田市のカルチャータウンにワシントン村があることは皆さんよく知っていると思います。アメリカ西海岸北部の州都シアトルをもつワシントン州が、その故郷であることはご存じでしたでしょうか。日本の国土面積の半分を有するも、人口は兵庫県の人口より少なく5百万人足らずです。豊かな自然環

境に囲まれ草原や林間にゆとりある住宅街がほどよく集積・散在しています。多くの白人（ゲルマン民族）が入植した歴史のせい、ダッチ（オランダ、ドイツ）の文化の色合いが強く、住宅は北（中）欧流の瀟洒な印象を与えます。ただし、レンガや石といった組積材料の代わりに、入植地の資源豊富な木材を

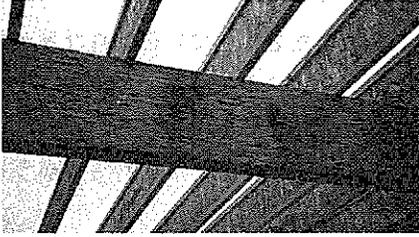


写真1：エンジニアリングウッドの施工状況、下部の梁はラミネ（チップ合板）のランバービーム（集成材梁）で上は小梁を兼ねたBCIの根本、このように構造用木材は無垢材はみられない。

多用している点がユニークというか地場産住宅というか、興味あふれるところです。

北米を代表する木は、ダグラスファー（米松）とレッドシーザー（米赤松）です。とくにダグラスファーは、住宅建材をはじめ木を使うところに欠かせない木材で、我国も食料同様これに依存しているのが実状です。しかしながら、このダグラスファーもかなり伐採され、アメリカでさえカナダからの輸入にだんだんと頼っているそうです。

6月中旬にワシントン州に行く機会がありました。その時もっとも感動したのは、この木材（建材）の変化でした。カルチャータウンのワシントン村が造られた頃は、2×4



写真2：2×6の施工風景、写真1の上にランバー壁で枠組壁を造っていく、日本でのアメリカン住宅もほぼこのように建てられる。なお、外壁はサイディングが目立つ。

工法の枠（軸組）は無垢の米松が多く、壁に使われる合板もランバー（薄い板を重ねて接着したもの）が主流でした。これは、原木をカットして使用しますので、多くの伐採が必要です。ところが、今回の見学（ワシントン村の故郷）では、枠組壁には集成材やBCIというエンジニアリングウッド（全て集成材、合板などでつくられた人工的な木材：写真1）が無垢材にとって代わっているのです。つまり、木のチップやかんなくずを再び木材にリサイクルし、原木資源を余すことなく利用し、できるだけ新規伐採を減らそうとしているわけです。

今、日本でもちょっとしたアメリカン住宅



兵庫県三田市にあるワシントン村のスナップとそのルーツであるワシントン州のごく一般にみられる住宅（リンデン近郊）のスナップ、両者は兄弟のようなもの。見分けがつかますか。ちなみに三田市ではホロンピア'98のキャンペーン中である。

ブームを迎えているようですが、もし、近所で工事中の現場（写真2）を見つけたら、その辺を注意してみると面白いと思います。

なお、エンジニアリングウッドの詳細説明書を和訳したものや最新のモデル住宅（施工

中から完成したものまで）の写真などがありますので、興味のある方は、ご連絡下さい。いつでも資料を提供します。

（大阪事務所 うちむら ゆうじ）

さんきょう 近況 さんきょう 近況 さんきょう 近況 さんきょう 近況 さんきょう 近況

研究課題と資料は自己の内にあり

近況ご報告

三輪 泰司

6月には、審議会等の重要な答申や報告が相次ぎました。私達自身の経営政策と個人の生き方にまで繋がっているように思います。

ご紹介かたがた、近況ご報告と致します。

リニューアル計画の原理と方法

最も早いのは、6月1日。建設省・建築審議会が発表した「住宅・建築分野の環境対策のあり方に関する建議」。

「京都議定書と私たちの挑戦」は人類最高の価値は何で、我が国は何をすべきかを“報告”しました。政府各機関が意志表明する番です。

建議には「公的主体においては、公的住宅・建築物の建設・使用・処分における率先的な対策に取り組むとともに、生産者・消費者に対する支援・誘導・規制等を行う..」とあり具体的に「省エネ法に基づく住宅・建築物の省エネ基準の改正・強化」あわせて「住宅・建築物の長寿命化の促進と、廃棄物排出量の削減対策の充実」を示しています。

次は自分の職能に立って行動する番です。

7月3～4日、大阪ガス(株)さんのお世話で、建築設備リニューアルの事例を学びに東京で高砂熱学工業(株)さんの現場を見せて頂きました。

いま“長寿命化”の一環として“率先的な公的主体”の維持・改修事業に関する計画・設計委託が増えています。

1970年代から80年代へかけて、経済成長期に建設された施設建築物の膨大なストックが、一斉に老朽・改築期に入っています。

深刻化する不況と財政難もさることながら温室効果物質の削減目標達成のために、公的主体が、スクラップ・アンド・ビルドより、リニューアル策を選択されるのは至当です。

一方、技術に着目しますと、コジェネレーションのように、エネルギーの有効利用や運転・管理システム、機器の省エネ化、ダウン・サイジングは著しいものがあります。

従って、設備機器の更新が動機になることが多く、収益計算にさとい民間企業が先頭をきり、補助制度の整備などを待って、地方公共団体がつづきます。

リニューアル事業は、単にお化粧直しや、機器・配管の取り替えではありません。

ポイントは3つ。①機能更新、②性能向上、そして、③内外装・アメニティの刷新です。

更には、地域計画の視野が求められます。

公立・民間含めて、地域にある施設群の利用実態（サービス圏域・充足率等）、メンテナンス（方式・費用等）、安全性（耐震・老朽度）などを調べ、地域施設管理基本計画のようなものを立て、年次計画に従って、リニューアルを進めるといったことをご提案致します。

地域の子育てネットワーク

児童福祉法の改正、介護保健法の制定などと並行し、昨年11月から進められていた厚生省・中央社会福祉審議会・社会福祉構造改革分科会の中間まとめ「社会福祉基礎構造改革

について」が、6月17日に発表されました。

社会福祉とは、他人を思いやり、お互いを支え、助け合おうとする精神から。報告は、社会福祉の理念は「個人が人としての尊厳をもって、家庭や地域の中で、その人らしい自立した生活が送れるよう支える」ことにあるとし「自助・共助・公助」があいまって、地域に根ざしたそれぞれに個性ある福祉の文化を創造することだとうたっています。

社会福祉サービスの利用と提供で言えば、“措置制度”では利用者は行政処分の対象者で、提供者＝例えば保育所とのそのようなおかしな法的関係を、個人が自ら選択し、提供者と対等の契約により利用する制度にしようといったことなど、確かに理念に従って、改革すべきことがたくさん溜まっていました。

そこで次には社会福祉法人側に、設立の理念からサービス内容、経営状況まで、情報公開が求められます（さて、建築士事務所はどうでしょう。欠陥住宅はつくりません、違反建築にくみしません、ミスをした時は保険がこうで、財務内容はかくかくと情報公開しているでしょうか）。

福祉サービスの効率化も進めねばなりませんが、市場経済・競争原理の導入となりますと、我が国では、油断ならぬところがあります。報告も、介護福祉事業などへの「一般事業者の参入」に触れています。「教育ビジネス」の次は「子育てビジネス」でしょうか。

京都市保育園連盟では、2月に児童福祉法改正に向け、保育システムの充実・発展への考え方をまとめ、保育研究所は先ず「制度・環境・子供の発達」に取り組み、保育園をバック・アップします。しかし、子育ては保育園だけではできません。地域社会あげての子育て力・教育力、そして地域自治の力です。

京都市では、昨年3月に「児童育成計画＝



京セラ御本社ビル南側のソーラーパネル、手前はメモワールビル、向こうはパルスプラザ

京・子どもいきいきプラン」を発表しました。

保育園は地域の子育て支援センター。

身近な小地域で有機的に機能する子育て支援ネットワークを提起しています。さすがに京都は児童の権利を守り、個性的な地域社会を主体にする“福祉の文化”づくりが進んでいます。「京都で子育てして良かった」と実感できるまちづくりに、働きましょう。

ひたひたと進む大学改革

文部省・大学審議会は6月30日「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」中間まとめを、発表しました。

いま、複数の大学改革計画策定に関わっています。共通する背景は“経営問題”です。

経営そのものは、私学経営審議会の守備範囲に属しますが、教学・運営を中心とする中間まとめにも、かつてない厳しい表現で、うたっている“改革”は、21世紀へ大学が存在意義を発揮するために不可避の道です。

金融機関と相似形だなどと思います。1980年代の危機、1990年代初め、自己責任の原則で立ち直ったアメリカ。

「京都・大学プラン21」のとりまとめをお手伝いした時、アメリカの大学淘汰と改革を研究しています。学校法人の設立は、1970年の46をピークに、抑制されましたが、学生定員数は進学率の上昇以上に、猛烈に増えました。

いま静かに淘汰期に入りました。1980年代

のアメリカと同じ様相です。先ず、専修学校・短大の閉校、“一条校”への移行・併合から、大学自身の自己改革に焦点が移ってきました。

中間報告では「教育内容の在り方」は、課題探究能力の育成にあり、そのために教え方や成績評価をしっかりと、それをできる大学の自律性ある運営システムをうたえ、盛んに「教員の意識改革」を強調しています。

社会に応えることと、探究能力を引き出す授業方法を統一するのが、建学の理念。

子育て支援の保育園と原則は同じです。

経営でも団体でも、幹部が組織運営に使うエネルギーは、外向き4分・内向き6分。大学でも同じ。研究対象とデータは自分自身の内にあり、も同じですね。

8月5日、京都ファッション産業団地に、京セラ㈱・新本社ビル竣工。ソーラー・システムも装備した95mビル。技術開発分野では、燃料電池、バイオ・エネルギーにも課題を拡げたいと思います。

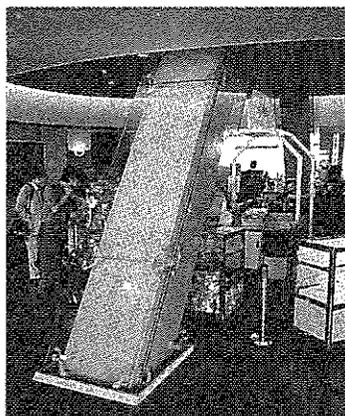
(取締役会長 みわ ひろし)

「海に浮かぶ光の舞台」を見てきました

森岡 武

淡路島は別名「海に浮かぶ光の舞台」と呼ばれているそうです。ご存じの通り、その舞台へと続く花道・明石海峡大橋が4月5日に開通しました。それをうけて早速、6月上旬に“舞台鑑賞”に出かけましたので、その感想を記したいと思います。

まず、明石海峡大橋の何たるかを自分の足で確かめたく海上50mの高さに設置された区間150mの橋桁内の展望台、舞子海上プロムナードを訪ねました。この施設は従来の管理用



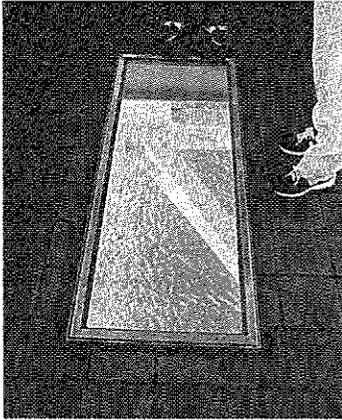
ガラスで覆われた主要構造部の鉄骨

通路を橋内で唯一人が歩ける空間として一般に提供したものです。主要構造部の鉄骨をガラスで覆ったり（見せることを意識した措置）、高さを実感させるためのガラスの床（ちなみに私は怖くてガラスの上に立てませんでした）など橋の壮大さを身近に実感させる工夫が随所で見られました。

橋の構造美に感嘆しつつ、いよいよ念願の明石海峡大橋へと向かいました。世界最長の吊り橋といえども直線的で橋長3,911mということで、心地よい風と潮の香りに心奪われている間に一気に走り過ぎてしまったという感じでした。

淡路島に到着すると目前に淡路SA（サービスエリア）が飛び込んできます。目指すは淡路SAに隣接する淡路ハイウェイオアシス。その駐車場は歩行者と景観に配慮した植栽が施され、メイン施設であるオアシス館の後方には約2万㎡の花の谷が広がり、四季折々の花約100種類が鑑賞できます。淡路の玄関口としての演出性を意識した絶好の休憩ポイントとなっています。

次に淡路島側橋台横の道の駅「あわじ」に立ち寄り、1999年春開校予定の兵庫県立淡路景観園芸学校（人と自然と社会の共生をもとめて花と緑による豊かな環境をつくり自然と



高さを実感させるためのガラスの床

生きる人の営みを取り戻す新たな分野「景観園芸」の実践的学府（パンフレットより）とそれに近接するあわじ花さじき（将来、約16万㎡の園内に約70種の花が四季を通して咲き誇るそうです）に向かいました。標高約300mにあり、淡路を一望できるロケーションは絶景でした。

さらに、北淡町震災記念公園“フェニックスパーク”内の野島断層保存館へと足を運びました。言わずと知れた阪神大震災の震源・野島断層を天然記念物として保存・展示した施設です。平日にも関わらずその観光客の多さには驚かされました。入口を潜ると、作り物の瓦礫に出迎えられ、さらに奥へと進むと目前に本物の断層が姿を現します。係員の解説を聴きながら断層を横目に機械的に流れる人の景は、止めておきたくない記憶の忘却過程を見ているようでした。ラッピングされ



北淡町震災記念公園

た悲劇の根源は出口に近づくに従い、その悲劇性が薄められていくようにさえ思え、なにか引っかかるものを感じながら施設を後にしました。

今回、訪れただけでも感じ入る所が多々ありました。しかし、舞台の企画・演出はこれからが目白押しです（ニュースレター87号参照）。世界にむけて光を放つ舞台の実現にむけて整備は着々と進んでいます。一度、じっくりと舞台鑑賞に出かけられてはどうでしょうか。

（大阪事務所 もりおか たけし）

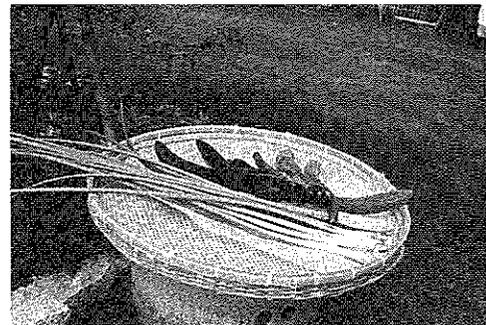
うまいもの通信②

芋茎に随喜の涙する

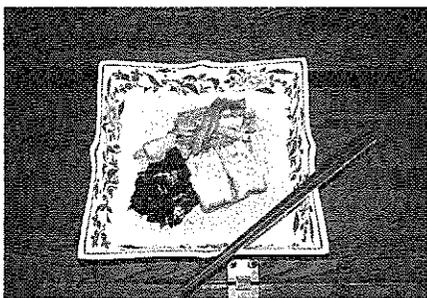
鮎子田 総理

野菜に季節がなくなったというのは、言われて久しいことです。トマトやキュウリは年中店に並んでいます。幼稚園や小学校の試験にも、「次の野菜の季節はいつか」などという問題がでるそうです。でも、まだまだ、その季節にしかお目にかかりにくいものもあります。芋茎ずいまというのもそのひとつで、店頭に並び始めると夏が来たなという感じがします。芋茎は、里芋の茎のことで、根の方の里芋は、ポピュラーですが、茎の方の芋茎は、レンジでチンする世代には、とっつきにくい野菜かもしれません。

大江山と酒呑童子の鬼伝説として知られる



大江山から送られてきた芋茎ともぎたての旬の野菜



芋茎と厚揚げの炊いたん

京都府大江町から、長さ1m程もある赤芋茎が届きました。大江町は東西を流れる由良川の昔からのたびたびの増水により、上流から肥沃な土壌が運ばれ、里芋づくりに最適な地形が自然な形でつくられてきたようです。里芋は水害に強く、また、保存もきくため、古来より重宝された野菜のひとつでした。普通芋茎は皮をむく時に手が赤くなったり、痒くなったりしますが、大江町の芋茎は、皮をむかずいただけます。しんなりとしていながら、ざくざくとした歯ごたえは他の食材には代え難いものです。味は淡白なので、お揚げさんなどと相性が良いようです。

秋になれば大江町の芋茎も収穫盛期を迎えます。夏バテした体の調子を芋茎料理で整えてみてはいかがでしょうか。

(大阪事務所 ふしだ みのり)

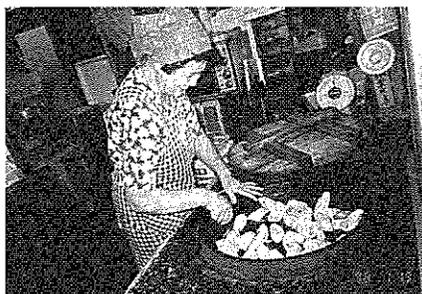
うまいもの通信④

中井商店のお芋さん

高橋 はるみ

八坂神社のある東山四条を二筋程上がった所にある小さなお店。何年か前にヒョイと買って、そのおいしさに病み付きになってしまったお芋さんです。

この道40年のおばちゃん(ごめんなさい。でも、この言い方が似合う気さくで、はりのある方です。)が、毎日作ってくれるお芋さ



おばちゃんの心のこもった焼き芋のできあがり

んを、昔馴染みのお客さんや、その口伝いのお客さんが買いにきます。お祖父さんの頃(70年前)から始めたというお芋屋さんには、焼き芋と大学芋があります。昔はお芋さんだけで充分収支があったそうですが、最近は原価が高くて売れても中々大変だそうです。お芋屋さんの数も少なくなったし。そんな話をしながら、さつま芋の皮剥いて、へた取って、水つけてと、休まず動く手元はさすが。使っている芋は徳島の鳴門金時、大学芋につける餡は、昔ながらの製法で添加物等一切なし。

焼き芋は、直径1m弱もある釜で30分ガスで蒸し焼きにします。焼き上がったお芋さんは、黄金色でメチャおいしそう。大学芋の方は油でしっかり揚げてあるから、外側がカリカリです。餡にたっぷり浸してあるので、食べる時は一口で食べるか(ちょっとキツイ)餡がおちても大丈夫なようにしましょう。

さて、一番美味しい食べ方は、お芋さんを買ったら一緒にお茶も買って、近くの円山公園へ行って、あつあつを即食べる!これに尽きます(ちなみに、飲み物は必需品です)。

取材に行ったのは7月の半ば頃で、今時分がちょうど新芋と去年の芋とのはざかい期だそうです。おばちゃんによると、新芋の取りたての頃は多少水くさいとかで、新芋が少し経った10月~3月頃が一番美味しいそうです。

京都に来られたら是非行って下さい。

(京都事務所 たかはし はるみ)

新刊旧刊書評紹介

早稲田ののちのまちづくり実行委員会 編著

日 報

ゼロエミッションからのまちづくり

紹介 林 孝昌

本書には、東京都の早稲田商店街の人々が、夏枯れ対策としてのイベントをきっかけに、「民間主導行政追随型」という、ユニークなまちづくりのあり方について、自分たちで考え、実行し、発展させてゆく姿が生き生きと描かれています。

早稲田の商店街が幸福であったのは、安井潤一郎さんという魅力的なリーダーを持った事に始まります。本書の中で安井さんは、分かり易く、面白い表現で自分たちの活動について語ってくれます。

安井さん達は、「自分たちのまちは自分たちで守る」という、当たり前のように聞こえて、なかなか実践し難いテーマを掲げながら、活動を続けていらっしやいます。まず、自分達がうごく。そうすると自分たちだけでは力不足であることに気付く。そこではじめて行政、企業、団体そして学校等との連携が必要だ、という事が分かる。この流れは、いわゆる「市民参加」の理想型と言えます。

「面白くない事をやっても人はついてこないし、儲からなければ自分たちが暮らしてゆけない」というのが、商人である安井さん達の発想です。1996年の8月に開催した、「エコサマーフェスティバル」は、リサイクルというまじめなテーマを掲げつつも、遊び心を忘れず、出来ることからやってゆく、という早稲田におけるまちづくりの原点とも言えるイベントとなりました。

このイベント以降、「早稲田ののちのまちづくり」という名の下に、リサイクル、バリアフリー、震災、インターネット、地域教育、元気なお店の6つをキーワードに、行政の管

轄を越えたまちづくりに取り組み、成果をあげておられます。安井さんによれば、早稲田での取り組みは「仕事」でも

「運動」で

もなくって「生活」なのだそうです。生活に行政のような管轄の区分はない。生活だからできないことはやらない。そんな自然体の活動を続ける上で、行政には正確な情報を流し続けて欲しいそうです。更に安井さんは言います。「民間ができることに手を突っ込んで欲しくない。」

ところで、大阪の天神橋筋三丁目商店街でも、地元にある大阪市環境局と連携しながら、ごみ減量モデル商店街としての活動を開始しました。まずは、この6月から7月にかけてのおよそ3週間、「青空カンバック大作戦」と名付けて、早稲田の商店街でも大活躍した「ラッキー缶」（懸賞付き空き缶・ペットボトル回収機）の設置を目玉に、リサイクル推進に向けたキャンペーンを行い、我々もお手伝いする機会に恵まれました。日本の社会が本当の意味で豊かになるためには、こうした新しい動きが全国的に広まってゆく必要がある、そう私は考えます。

(大阪事務所 はやし たかまさ)



まちかど

空から見た“まちなみ”と“うみ”

竹野 潔

航空写真の撮影のため、カメラマンと高松空港から坂出港と瀬戸大橋上空をセスナ機で飛行する機会があった。今回は「まちかど」ではなく、空から見た「まちなみ」と「うみ」の印象について書いてみたい。

四国地方の梅雨明け宣言がされた次の日は、気温30度を超える暑い日であったが、上空約2000mの散策は涼しく（少し怖い時もあったが）快適であり、視程が50kmもある絶好の撮影日であった。

空から見たまちなみは、地肌に見える開発進行中の現場や、山では土取り場などが点在し、それが強調される。また一方で、山や田畑は緑を基調とした色に見え、住宅地では一部にスプロール開発も目に付くが、色彩的に

は馴染んでいるように見える。その中で、とくに山が切り取られ、地肌が露出しているのを見ると、まるで山が大怪我をしているように感じてしまった。

次に、瀬戸内海上空を飛行すると、海上に青潮が発生しているのが見えた。まるで青い絵の具を海に流したように、西から東への海流にそって帯をなしている。島にさえぎられた部分では、ちょうどその帯が二つに分かれ、しばらく流れた後でまた合流している。

今回の飛行で、陸と海の二つの陰を少し見たが、飛行の目的である写真の方は、ごらんのとおりすばらしい写真を手に入れることができた。皆さんも機会があれば、普段と違った角度からまちを見てはいかがでしょうか。

(大阪事務所 たけの きよし)



高度2,500フィートからの瀬戸大橋
フォトographer: 秋山啓夫 (航空写真製作所)



坂出北インターチェンジ付近
(撮影: 筆者)

アルパック (株) 地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- 東京事務所 〒160-0022東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673